

## 「ハイデルベルク・ストラスブール派遣 参加報告書」

京都大学文学研究科修士2年 横田 悠矢

今回のハイデルベルク、ストラスブール両大学の訪問では、施設見学および現地の学生たちとの交流を通じて、それぞれの大学で日本学を学ぶための制度、および学生たちの意識に対する理解が深まった。なおハイデルベルク大学については他の報告書に譲るものとし、ここではストラスブール大学について言及する。

ストラスブール大学の施設については、日本語学科のある“Patio”に加えて、法学、化学、植物学、物理学、神学、哲学等の講義棟を、現地のシャール先生ご案内のもと見学した。また国立図書館“Bibliothèque nationale et universitaire”を訪れ、職員の方から設立の経緯や蔵書の特徴などについて伺った。

ストラスブール大学博士前期過程の学生たちとの交流は、彼らの研究活動や日本語学科の仕組みについて詳しく知る機会となった。学生たちの研究テーマは、妖怪、将軍の鷹狩、大正期のフェミニズム運動など多岐にわたり、日本に関する主題であれば幅広く受け入れられるという印象を得た。博士前期課程のうちに一年間日本へ留学する学生が多いという点にも、彼らの意識の高さを窺うことができる。ちなみに学部は他言語と日本語を並行して学ぶコース（LEA）と、日本語のみに集中するコース（LLCE）に分かれるが、3年間で博士前期過程に進学することができるのは後者のみであり、彼らの高い語学能力が学部時代から着実に培われたものであることも興味深かった。講義以外にも、意欲ある学生は“Spiral”という、ランゲージ・エクステンジのパートナーを見つけるためのシステムを活用し、交換留学生など現地に住む日本人と積極的に交流している。

報告者は2011年から2012年にかけてストラスブール大学へ一年間の交換留学を行ったが、当時交流を深めたフランス人学生たちは往々にして学部生であり、日本語学科の研究室を訪れたり、博士課程の学生と互いの研究について話したりすることはなかった。短い滞在ではあったが、今回の派遣では日本についてより専門性の高い内容を学ぶフランスの学生たちと交流でき、日本でフランス文学を学ぶ自身にとって大きな刺激となった。また今回は日本学を学ぶ学生との交流ということもあり、日本語を話す機会が想像以上に多かったが、これはむしろ自身がさらに外国語を（あるいは外国語で）学ぶ動機を高めるものとなった。報告者は以前から博士後期課程でのフランスへの長期留学を検討しており、この派遣プログラムを経ていっそう意欲が高まった。ハイデルベルク、ストラスブール両大学とのさらなる連携強化のためには、日本人学生への情報提供や動機付け、また単位互換制度などさまざまな課題があると思われるが、今回の派遣が一助となれば幸いである。